

# カルバペネム系抗生物質使用適応症の検討 ～届出制開始後 4 年が経過して～ 上尾中央総合病院の取り組み（第 3 報）

小倉 潤子<sup>1</sup>、中野 泰寛<sup>1</sup>、藤本 希久加<sup>1</sup>、加藤 彰範<sup>1</sup>、増田 裕一<sup>1</sup>、平原 一也<sup>1</sup>、  
大江 和夫<sup>2</sup>

<sup>1</sup>医療法人社団 愛友会 上尾中央総合病院 薬剤部、

<sup>2</sup>上尾中央医科グループ 本部 薬剤部

## 【目的】

上尾中央総合病院（以下当院）では、平成 15 年 4 月よりカルバペネム系抗生物質（MEPM、PAPM/BP）の届出制を実施しているが、4 年が経過した現在、使用者数が増加傾向にある。今回、過去 3 年間の使用症例について集計を行い、当院におけるカルバペネム系抗生物質使用適応症を検討したので、その取り組みについて報告する。

## 【方法】

平成 16 年 4 月～平成 19 年 3 月にカルバペネム系抗生物質の投与が行われた患者を対象とし、科、年齢、投与日数、細菌培養結果、併用薬剤、使用直前の抗生物質、使用理由について調査を行った。

## 【結果】

全体の使用例数は、平成 16 年度 267 例から平成 18 年度 350 例へ増加、特に循環器科の肺炎症例が約 2 倍、外科・消化器科の腹腔内感染での使用症例が約 2.5～3 倍に増加した。平成 18 年度 350 例のうち、約 4 割にはグラム陰性桿菌が検出されていたが、あとの 4 割は一般細菌検出なし・グラム陽性球菌（真菌含む）の検出のみであった。カルバペネム系抗生物質を使用する直前までの投与薬剤は、第 4 世代セフェム系が最も多かった（平成 18 年度 107 例）一方で、第 1 世代セフェム系からの切り替えを行った例も少なくなかった（平成 18 年度 29 例）。これらの現状をふまえ、当院でのカルバペネム系抗生物質使用適応症として、1. グラム陰性桿菌または複数菌による感染症、2. 第 4 世代セフェム系かつアミノグリコシド系が無効の感染症等、6 つの条件を掲げ、使用届の改訂を行った。

## 【考察】

過去 3 年間の使用患者のデータ集計結果より、改めて当院での使用状況や傾向を把握することができた。今回、指針を設けたことは 1 つのステップに過ぎず、今後の継続的な取り組みと評価が重要である。現在は合わせて抗菌薬使用マニュアルを作成中であり、さらなる適正使用の推進に努めていきたい。